

「画像診断のための 知っておきたいサイン」

慶応義塾大学講師 甲 田 英 一
 済生会中央病院医長 古 寺 研 一 著
 慶応義塾大学助教授 平 松 京 一

順天堂大学教授

片 山 仁

本書はわが国で初めての企画と考えられる“計測値”の姉妹篇として出版されたものである。非常に簡潔に図解入りで画像診断に際して常識的となっている所見（サイン）をまとめたものである。非常にハンディな本でサインに関する知識を整理するのに都合が良い。図解は思いきって簡略化されており、結果としてサインの特徴をよく表現している。原著が出て時間がたつと、各人のサインに対する理解は、原著と少しずつ変わって、修飾されていくのが常である。時に原著が意味する内容と異なったものにすりかえられる危険がなくもない。フィルム読影カンファレンスなどで所見を説明する場合——サイン 陽性 といえれば一口で済み、情報の交換に非常に便利であるが、もし人によって同一サインに対して異なった意味付けをしているとすれば、もはや共通語（情報伝達の媒体）とはなりえない危険がある。したがって——サイン陽性という表

現はその内容を正しく理解して使うべきであるというのが小生の持論である。サインにはいろいろなサインがあり、数えあげれば大変な数になるであろう。サインの中にはその言葉からイメージが湧いてくるものもあるが、一方、イメージとは全く無関係につけられた呼び名のサインもある。人名を冠したものであったりすると、その分野の専門家以外には何の意味もない言葉になってしまう。

このように——サインには便利さと共に不便さがある。本書を通じて皆がサインを正しく理解し、正しい共通語として使用できるようになると思う。

わが国では米国のX線診断の情報が戦後、怒濤のように流入してきた。レントゲンサインもその1つであった。X線写真の読影はサインの内容にのっとって行われながら、単に——サインという表現を知らなかったばかりに、何となく遅れている

感を免れない雰囲気もあった。サインアレルギーがあることも事実である。このような状況の中で、敢然とサインに再挑戦した甲田先生はじめ3人の著者の画像診断に対する意気込みと努力を買いたい。この3人の著者はサインを丸暗記することは決して望んではないと思う。むしろサインを1つの拠りどころとして論理的な診断の展開を望んでいるに違いない。

著者の3人の方はそれぞれ放射線診断における切込み隊長である。甲田先生は小児放射線診断を中心に骨関節のX線診断や血管造影の分野で活躍しておられる。古寺先生は画像診断のあらゆる分野をこなすオールラウンドプレーヤーである。平松先生は血管造影の第1人者であり、その名は内外に響いている。これら3人の方の知識をもってすれば、もっともっと書きたかったであろうが、そこをおさえて簡潔に本書をまとめた苦労が大変よくわかる。

本書を利用する対象はレジデントレベルが多いかとも思われるが、読影室の座右におき広く利用されるものと思われる。読者は本書を糸口として画像診断の深さを学ぶべきと考える。

A5判 248頁 図196 1983年
 ￥3,600 ㇔300

医学書院 刊